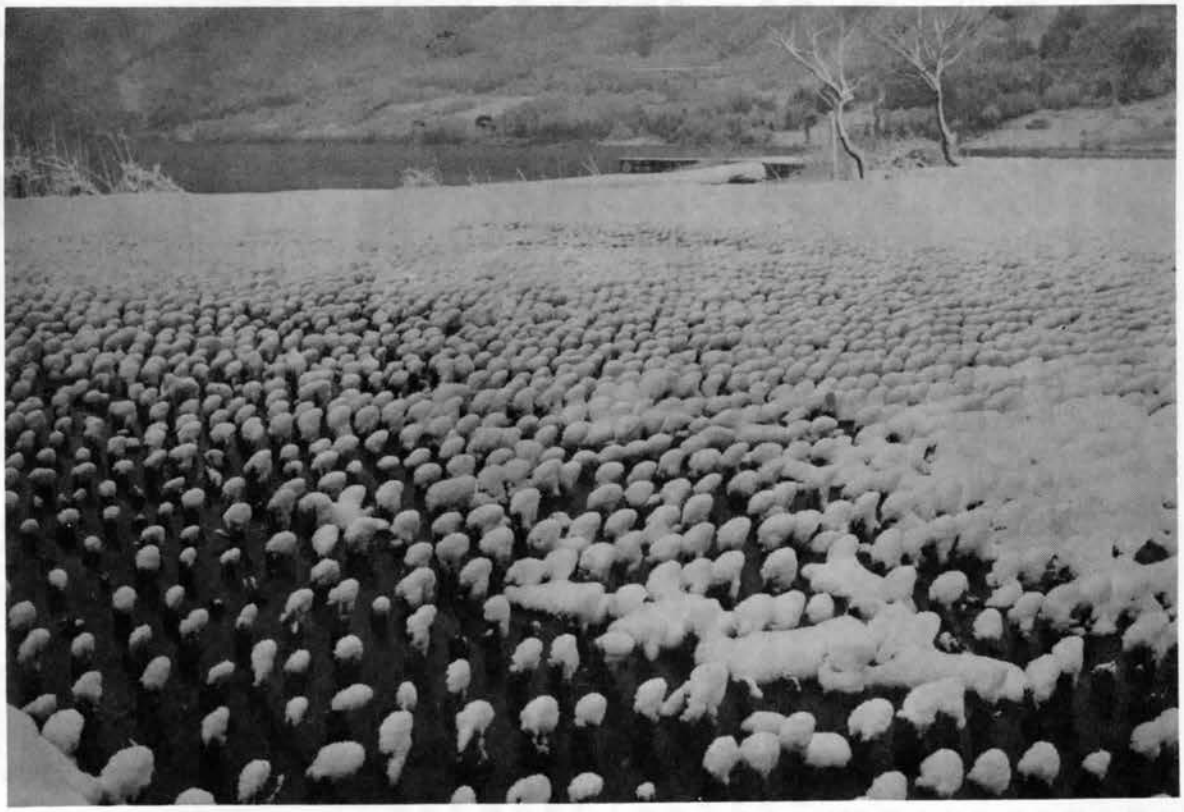
山と博物館

第17巻　第11号　1972年11月25日　大町山岳博物館



初雪　木崎湖畔にて　撮影　山本　携挙

情報

これが駅、これがバイパス、市民会館がこれで、公民館がこっち、有料道路はこれか…とこれは机で拡げた地図の上を眼が追った順序である。スペース上の大町市の概念は、何の苦もなく、また瞬時にとらえることができる。今度新しくどこの部落が開発されるとか、何々道がどこを貫くとか、もしも新幹線が通ればこの辺が新駅の位置じゃないか、などと、いろいろな思惑が先づ脳裏をかすめたのち、この地図の上へと移行してゆく。いま仮りに一つの開発プランが起ったとすると、そのプランのほとんども、この地図の上で構成され、パターン化されてゆく。そしてさらに地図から得た感覚が情報となり、あらゆるメディアを通じてコミュニケートされてゆく。

私はよく、大町の東山に登って街や、風景を眺める眺めはじめてからの二十年ぐらいの間にも、駅は大きくなり、市民会館もでき、有料道路も白い線となって現われた。勿論家並は拡がり、高層化し、その型も色も変って、かってお盆の底のように平で広かった田んぼや原野が、まだらにちぎられ、せばまってきている。変らぬものといえば、遠くホリゾントに連なる山並だけである。そこで見る大町市の地図は平面で四角な机の上のそれとちがって、空間があり、高低があり、風や温度や、音の響きさえも感じられるが、南から北へひろがって見えるこのパノラマは、また一つの曲面としてつかまえることもできた。家の中で考へるよりも、はるかに現実的で、限りのある土地であると思った。いつか子供と一緒に鷹狩の頂に立ったとき、子供は「とうちゃん、地図のようだね」と叫んだ。これは子供が体験でつかんだスペースに対する感覚であり、さらには地図の概念との一致によって見出した実感である。この実感こそが大切ではないだろうか、近時私たちのまわりには、この実感の伴わない情報が如何に氾濫していることか、それはどんなに多量に導入されても、泡の如く消え去ってしまう運命にあろう。いろいろな人が、いろいろな角度でとらえ得た、個性的で実感的情報が集約されてこそ、はじめてそこに、すばらしいプランニングが起り得るのではないだろうか。

―（山鳴）―

登山用具の変遷 (2)

西岡一雄

山でパイプを愛用しだしたのはパトミントン・スタイルの頃から初まって以来いまだにつづいている。鋸と鉈とは昔も今もかわりなく重宝がられているけれども、帽子のみは多彩多用で、運動帽あり経木の鍔広ありクロスキャップあり中折あり、然してベレーありチロル帽ありという風である。

大正に入ってから女子登山のきざしがみえてきた。女生徒は各々の正規の学校服をきていた。わずかに金剛杖と草鞋あるいはゴム靴と糸立そしてルックで登山者のみわけがついた。きものの裾を折り経木作りの帽を戴き脚絆、草鞋、杖、雑嚢、そういうなりをして一般の女性は登山をしていた（おもに大正時代）ただ自覚した人のみが、大型のルックを担ぎ山行にふさわしい洋装をして登った。登山靴が普遍化するようになってピッケルも持たれた（昭和初期）。

さて、昭和になった。山内東一郎が仙台で ピッケルとアイゼンを打ち出した。札幌の門田直馬が一年をおいてこれを追った。この二つのものは日本を代表して恥ずかしからぬ名品であった。ウイムパア天幕はいち早く既に明治の岳人にも知られていたけれども、昭和になって冬山が大いに盛んになるに伴い、ここに再認識されることとなった。

六年頃に、京都大学は富士山に極地法を試みた。その後、白頭山厳冬期の登山により、わが国初めてアークチックテントが作られた引次ぐ立教大学のヒマラヤ遠征により、カマボコ型天幕がまた表われた。ランタンから電灯へと進歩していた。ひとえの寝袋が絹綿を中味とした寝袋になった。水鳥の胸毛を入れたのが最上とされた。やかんを携えて湯を沸した明治時代からコッヘルにすすみ、メータを焚いたのが、ラヂウスという火力の強いバーナーが使われて天幕生活は大いに楽に愉しめるようになった。

この頃になると草鞋という名を知るだけで実物を知らない若い登山家が沢山にいた。みな靴になっていたからだ。そうなるとここに厄介なことに打鋲法が論議された。トリコニー、クリンケル鋲の優劣やら配列法がそれであった。いつしか岩登りが登山の主流のように思われてきた。その登山にも動的な登山と静的な登山に分化して、ここにもアルピニズムに関しての論議がかわされていた。

めっきりと女流登山者の増加が眼についた。男にも劣らぬ大型のキスリングに一杯詰め込んで一流のピッケルを小脇に抱えてガイドレスで登山した。ゴッグルクロスキャップ、アイシエード、これらの人々の多くはニッカ姿であった。テルモスもコッヘルも依然愛用されていた。ピッケルの紐はいつしか移動式になっていた。八、九年頃からであろう。同じ頃、チロル帽がいたく流行し出した。山はまさに多彩の交を増した。

朝鮮、千島、台湾へと引続く遠征は、これらの用具の進歩に拍車をかけた。大正の末、大島さんがバドミントン・スタイルをかいた頃から、ブライヤに火をつけて吸うことがはやり出した。岩小舎にねそべって、一吹しながら人生を論じ山の宿命を語りあう、そういうたのしみが、このパイプから吐き出される一吹によってかもし出されていた。

登山者の増加はついに山小舎の濫立となった。登山は容易く一般化し宿泊は自由となった。これに伴ってガイドレスや単独行者もふえたので、あの明治大正と続いた名案内人の輩出も活動もひたととまりむしろ登山者のベテランは案内人以上に山に詳しくなっていた。

ウインドヤッケというものは既に大正十年頃にもあったように思われる。だが、アノラックの名に於て知られるヤッケは、麻生武治さんによりホルメンコッレンのオリンピック大会の時招来され、昭和のヘルゼット中尉の来朝により普遍化されたようである。フイヒートル・ハーケンもカラビナも昭和に入ってからそろうので、大正期の物はリングハーケン、ペッグが主で、カラビナは粗雑で形だけがカラビナであった。

戦後は何もかもかわった。「年々歳々花相同、年々歳々人不同」と唐人は詩ったが、その自然でさえかわった。試みに思え、喜作新道がつく以前の槍ケ岳周辺を、山は寂漠として太古の姿であった。しかるに今は、山上にさらに人の山が重りあっている。山小舎が競い建って狼藉の限りである。

ある日、僕は中尾峠を越した。人は前後に続いて踵を断たない。ヨーデルが谷間から流れてきた。峯からは流行歌が聞えてくる。頂上小舎ではラジオが山の天気を報じていた。三々伍々と木の根枕に草を褥に男も女もねそべり、ある者はテルモスの紅茶を傾けある者はチョコレートを噛っていた。糸立にかわった空気入りマットをしいて歓談にふけっていた。小舎のまわりは缶詰の空缶でところどこ

明治時代の女子登山風俗

富士山以外では女子登山はなかったから、大正初期もおよそこの姿で登山した。これは普通の人のもので、脚絆は白が正しい。

大正昭和時代

靴は白い運動靴。小さなルックに沢山の小鈴を吊って鳴らして歩いた。

昭和時代初期の登山風俗

パイプ、とくにダンヒルは登山家の資格の一つであった。ニッカ姿はイキであった。十年前後にはチロル帽の流行があった。小脇にピッケルを抱えるのも特長であった。登山のための登山服は大正にもあったけれども、昭和になってこんなに立派になっていた。

ろ小丘を形づくっていた。

紅色のルック、藍色のルック（昔はこんな色のルックは誰にも嫌がられていた）、不意に小舎の鐘が鳴った。一体何の合図であろうか。今や山は文字連り全くプレイ・グランドである。かと思うと、若さと自信溢るる青年が峻嶮鳥ならでは寄りつき難き岩頭に挑んで、あたら空しく散ってゆく者もある。

そういう人のために、また、極めて精巧無比な登攀器具と高度の技術とが身近に感ぜられる。岩に穴を掘り又それをうめるものからルックや他の必要品を揚げ降しするフイフイとか、デクロシエとか、そして鐙（あぶみ）は常用化した。こうして人命に必要なためには、何を用い、どういう登り方をしても又どういうことをしても差支えないという考え方にかわってゆくから、昔、やかましかった英国風の窮屈な道義観念は今やいたくうすらいできている。

困難な登山のため、従って用具の発達は好むと否とに係らず、こうなってゆくのも仕方なかろうか。ピッケルの頭に穴があいた。このため確保は一層安全性を増した。ロープはナイロン糸へと移ってゆく、これにも安全度が強まった。靴底はビブラムとかわったからもう面倒な打鋲の配慮はいらなくなった。ラジオで山の気象予知ができるから注意さえ怠りなくば遭難は一応さけられる筈である。無線の使用は、お互に連絡がとれて万事に好都合となった。

要するに現代人の登山は特種な人からはなれて、直接に社会の家庭や台所にまで直結したから、都会のぜいたく品もそのまま山中で使い、或は喰うことができるようになった。石油コンロ、プリマス、ブタンガスコンロ等がその一端の役目を果たしている。またテトロンとか、B・B綿とか、化学繊維の発達は人体を温めて登山を快適にかつ容易ならしめた。

これらの品々は明治期には勿論みられなかったし、大正期に於てさえコッヘルぐらいしかなかった。

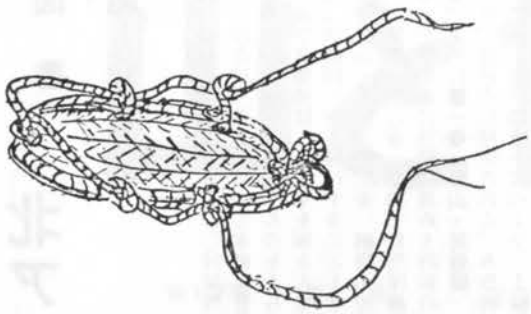
スキーについて一言ふれるならば、一本の長杖と締具そしてリリエンフエルト式を、レルヒ氏は明治四十四年に日本へ持ってきた。それが皮革系統のコイットフエルト締具に移るのは大正八・九年頃にそのきざしがみえてきた。以後この締具が全盛をきわめている中にも、金具と皮革との折衷式数種の締具が交錯して愛用されていたがいつしかカンダハールへとかわっていた。杖は両杖へ、竹はトンキン竹へ、そしてついに金属製となった。

スキーその物は、単板から合板となり、まさに金属製が完成されつつあるから容易に折れることはあるまいし、また狂ったりもしないだろう。塗蝋の苦労も昔話となりつつある。故に、パラーもメターも今はいらない。そのかわりシールスキンがなくなって人造シールが作られた。著しい変化は、昔はちょっとスキーが滑れるようになると、すぐにお山の天辺へあげられ、ツワーへと一日がけで遠出にかり出された。

それをくり返している間に、いつしか山スキーの要領を会得したものであった。今のスキーマンは技術こそ向上し用具こそ比較にもならぬ程大進歩をしているのに、ひたすら易きにのみ頼り、リフトに吊しあげられ、ただ遊びにのみふけっているから脚力強靭の基本的動作を欠くから遠出の気迫を失ってツワーに逡巡する。技術の不備を頑張りで補った昔のスキーが、繊細な技術のみの遊びのスキーとなってしまった。

要するに、明治はまだ探検登山だった。登山のための特別な物はなかった。人々はある物を在りのままに使っていた。蝙蝠傘、小用原提灯、草鞋、生蕨座をみてもわかる。大正は先ず冬山からロッククライミングが展開して、末期に於ては近代登山の全貌を整えた。ツエルトザック、ピッケル、アイゼン、ベッアートコムハスをみればよく判ると思う。昭和に至ってすべてが完備した。優秀な用具が日本で出来るようになったから、輸入にまつ必要が減った。山内・門田のピッケルとアイゼン、片桐と好日山荘のルックと天幕、美津濃と其他のスキー、高榴と日ノ丸の靴、登山に要する本筋の道具はもうメイド・イン・ジャパンで十分となっていた。戦後はいれず。

（三八年一月三〇日紀州田辺にて脱稿）



草鞋（わらじ）明治，大正

かつては誰でもみなこれをはいた。昭和になってからは全くすたれて，わらじを知らない青年さえあった。けれども日清戦争の軍人はみなわらじであったわらじはわらが普通がだ麻でつくったのもあった。

昭和時代女子登山風俗

リーダー格である。ルックも大型なら靴もピッケルも一流品である。

ルックは必ずキスリングであった。靴の柏木品になかったけれども、ピッケルは好んで外国製のものをもった。

昭和戦前の一部学生の登山風俗

ガイドレスなるが故にすべて自分で担った。八貫目はあった。ピッケルは名品で腰皮はカモシカ、登下は長短二枚を重ねた無性ひげをはやしていた。

図書紹介

北アルプス博物誌
―登山・民俗―

大町山岳博物館編

本紙「山と博物館」通算二〇〇号発刊を記念し、このたび、過去において本紙に登載された著作物の中から、適当なものをえらんで『**北アルプス博物誌**』全三巻を編さんし、社団法人「信濃路」から発行することとなった。第一巻　登山・民俗、第二巻　植物・地質・民話・文学碑、第三巻　動物・自然保護とし、ハイカーや登山者に気軽に読める内容のものとする。すでに**第一巻（登山・民俗編）**は印刷を終り、近日中に発売される。**A5判、三百三十二ページ、口絵十六ページ、上製本。定価八百五十円。**ここに、第一巻の目次だけを紹介する。

内容

一、登山の草わけ
近代登山草わけのころ　志村　鳥嶺
日本アルプス横断記
―四十年前の針ノ木越え―　高須　茂
白馬岳百年　福岡　孝行
日本アルプスの父
ウエストン氏をしのぶ　高橋　秀男
日本アルプスのぬし
上条嘉門治を偲んで　平林　国男
遠山品右衛門翁遺品　向山　雅重
山でつくられた郷土の科学者
河野齢蔵先生　高橋　秀男
山や里のことなど　長沢　欽平
大町を囲む山々　平林　武夫
針ノ木峠雑記　百瀬慎太郎
餓鬼岳のあゆみ　金田　国武
白馬岳小史　長沢　武
黒部奥山廻りと信州　広瀬　誠
信仰の山〝立山今昔〟　鈴木　保二
立山・剣岳の開山　広瀬　誠

二、回想の北ア
北アを想う　田辺　和雄
人のいる山奥　奥田郁太郎
館を訪ねて…大町と私…　田中　薫
百瀬慎太郎さんを偲ぶ　平林　武夫
大町登山案内人組合と慎太郎さん　平林　武夫
大町周辺の思い出　井手　賁夫
山と大町のことなど　塚本福次郎
餓鬼岳のおもいで　袋　一平
思い出の秋山　平林　武夫
霧の大キレット
…ある高山蝶の思い出…　田淵　行男
この頃の山で　田淵　行男
北アルプスの想い出から　村井　米子
スキー場の想い出　丸山　彰
つべたの爺…柏原長寿氏…　千葉　彬司
平林武夫さんを偲ぶ　清水　悟郎

三、北アの山々
北ア静かなコース
舟窪岳・唐松岳
風吹大池・雨飾山　松沢　宗洋
黒部渓谷を囲む山々　武田　睦男
黒部源流を訪ねて　大町山岳博物館
私の好きな太郎兵衛平　武田　睦男
槍ケ岳北鎌尾根　平林　武夫
内蔵ノ助平から山荘へ　富樫　稠門
秋の雨飾山　黒柳　則子
紅葉の鹿島槍岳　福島　寿子
冬の西穂高岳　宇佐美麗子
唐沢岳　久保田　稔
唐沢岳「幕岩」　久保田　修介
針ノ木岳・赤沢岳周辺　長沢　修介
スバリ岳西面登攀　武田　睦男
山小屋に住んで　大塚　一郎
白馬岳日記…山小屋の生活…長沢　勲　福島　寿子
針ノ木小屋　小日向忠夫
鳥帽子小屋　上条　鉄一
冬の山小屋四十日…唐松小屋…　上条　幸
ナイロンザイル事件　海川　庄一
吹雪の二十日間（遺稿）　福島　与一
岳人の里　鹿島部落を訪ねて高橋　秀男

四、山麓の民俗
平林高吉氏のワラジ　向山　雅重
山のワラジ　向山　雅重
北ア山麓の
正月三カ日の行事　青木　治
北ア山麓地方の稲作慣行　青木　治
仁科神明宮の春祭り　横沢　幸男
田の神様　長沢　欽平
流鏑馬の神事
…若一王子神社例祭…　長沢　欽平
仁科神明宮の神楽　横沢　幸男
消えゆく山村とその民俗　青木　治
郷土の文化財をたずねて　平林　国男
石神・石仏
…道祖神・庚申さま…大黒さま…　青木　治
北安曇の古墳　篠崎健一郎
小谷の仏像　幅　具義
郷土の民芸品　内山　慎三

五、山の歴史
日本の登山小史　山崎　安治
登山用具の変遷　西岡　一雄
山のガイドたち　高須　茂
北アルプス北部の山今昔　長沢　武
資料　白馬岳小史　長沢　武

（前ページより）

（挿画はみな当地の山岳会員、遠山誠之助氏の手をわずらした。御礼を申上る。拙著「登山の小史と用具の変遷」より復写したものである。その原図は岡部一彦画伯による）。）

編集部註　本稿はかつて「北アルプス博物誌」と同類の単行本出版の企画に基いて執筆されたものである。筆者西岡一雄氏は元大阪税関職員、登山用具店「好日山荘」開設者。滋賀県大津氏出身。故人。筆者の遺稿となった本稿を本紙並びに「北アルプス博物誌」に登載し、筆者のご厚意に報いたい。

博物館だより

「北アルプス博物誌」を出版

創刊以来十六年余にわたる本紙「山と博物館」に登載された、数多くの文章をもって、「北アルプス博物誌」（全三巻）の編さんが進められております。すでに第一巻（登山・民俗編）ができ上り、十一月末には、社団法人「信濃路」から発行されます。長野県内の主な書店をはじめ、全国の書店で発売されますが、当館並びに社団法人「信濃路」（長野県長野市南県町産業会館内）でも購入申込みを受け付けております。定価八百五十円。第二・三巻は来年四月頃発売の予定です。

コブハクチョウを湖面へ

十一月一日から全国一斉に狩猟期に入りましたが、大町市の木崎湖は鳥獣保護区となっていますので、今冬も水鳥たちの楽園となることでしょう。当館では、湖畔の稲の収穫期も過ぎたので、湖の一角で飼っている九羽のコブハクチョウを、例年どおり湖面へ放しました。

山と博物館第17巻第11号
一九七二年十一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二二一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）